吾吟我集 全

入利タ
2828

ア利へ門
2828
巻

宮内省圖書寮

やまと田舎の人の、ものいふこと、をかしうて、
まことの稲のこと、ものまうでの道、
山寺、雲居寺、玉造、七夕、摩耶
まつ、ぺんぺんなどいふ。麦つきなどいふ。
うたをもつくりいでもせるなり。ものの琴を
くまでぺんぺんなどいふ。ものの琴を
いきとし池のそこのみぞ、いづまの海と
うらいばらをもいふ。ちうとをもいふ。てあひ
橋とうぶり。田乃乃んえねぶぜ、ぢんとも
あいまことはなせ。おとこおれねんをも

やまとげたものさをの、ゆんをもうかう
次い小ものうりぶうをあるのさを
きゆうやいぞ、きみぶんぷうあるて世ま
をやれまいぷ入るのたのあげさて曽
ぶ。ゆうたく振みぢゆうぢうのた
ちとうてい。碓ゆうをのこれは
ををむうぞとうをぷうをのこれは
おどうあは。氏みの数ぢゃあぢうる
くみてぷぢゆうーとをぢうう
あうー。人乃巻をりうれ

それぞれ味はひ深く人をさそふ
さいうこひあり。かくてそれぞれ花見をして高
とまうアと寒をくゝ。霧をうのむ雅が
けかぜ。ゆひうるばれらろことばか
はくさ面くゝみ。わりにまを。さを寒色
かどぐを。けのとのろびしらうひ
そめて海汀をワらう。そうきゝ絲色ふ
とりうらゆじゆを。家ちう。ゆま
雲うゝ。むく筆ゃでも。ひのがまる
馬うゝを脱乃かぐけみゆべ。か

ふゝめうゝ。いゝかぜ乃れんゝじあり。
あうゝ山のことばとう称めりくせまひみ
けうゝてゝ乃ふうゝ。いちゝれいさ
絵よく。韻のをゆふるどものぐめそ
うけ。そをくうゝのけまくむうゝ。
麿乃奇をかうゝぞあるべさ。そ乃むきくさ
乃ゝと川よはけまゝの。大業螺のかゝ
き紅をへそを。かうゝ

なふをあくゝむるぞゝひ乃ゝ
いまは業麿ぶをけゝろふ乃ゝ

[illegible]

[illegible]

[illegible]

こうり物よりはのそやとるせり
ばうさいらむ方といかてとせ
野にうるつむ下女らろはらとい
らやそらてめでたうんおやうそむさらる
ゆをたべくもけていえしもむしさあとにすん
今の世中多よつきぷ人のらろ曇のちき田
禁みのりみあがらちぷがあがろやりうこ。
ちつるのきおとのこおくまでぞそ小神の多
よのこれ家みぷらちみの他の中ろまねこ
ゆくのりてぷ内あるごろみけ曇どりと
くむかりとべきおてあもあぶのりまち。
そのあ知くまをとゆ知りんばぷがあくるん

あるのぷすりへの世よりがあ人まぷのもんの
えろぷ。秋の月見のの和ごとにぷがゆひたち
とめりて酒高よつけけくうとうろうめ
ぷりぷがいもそそりやそあらりのきが
みの内どむぷり野ろせのむらりもりみち
ちりもぷりりきく人いんこいやどやぷがは
月とりとそぷうが色のきやこの和ありき
みたりぷうんのやこふもの内よろねこきを。
ありでそうの内のまりよいえやがるやどうみ
とやてぷうけりでとろうりやうこげあがひ

ゆんぷんのこゝろあるぶぜんぢまに石れいの
ぜうりて。苔乃むしあるこゝもとうそうと
吟じ。はくぐ山のちいろよりけて色
しくとゝろとゝろびい未(みぐ)保(ぐ)十徳(ろぐ)月
すぐ。そのこゝはこゝろとうぐるとのこゝろ
ゆゝろみあゝまつ。むしの乃煙み富士いこの
ゝはせこゝろて人ゝをゝ色。松むしの祢のこん
ぢろゝとゝもみこゝねんげみ聲あそびの
友とゝのび。高砂をみの江の松の系に
乃へゆゝり寝いおひゆゝり色乃やうにたげ

奥地とゝ山のむしーと思むく。とこゝへ
しの乃ゝと対とゝ移ゝもむのゝんきゝり
かゝとぞうこゝ色ゝ色ゝ乃羽食の浦
ちゝと花鳥(ちょう)と月。林の人ゝに為ゝ本
のこゝを菓子ゝんときこゝけゝ年のく
きゝぶゝみ。鏡乃餅のびみ月ゆゝ。ゝ乃形
ぶゝぶくけゝのまゝるかゝらの宮。ゝきいの
こゝ沢もゝ祢ゝ酒をゝるげきゝ。あゝ地方の雑
せんゝ京のゝけゝ伏月てゝ酒ゝゝむゝ乃
月伏地ゝゝあゝきゝ。けゝゝきのゝ酒屋へゝば

きゝ侍の英とうゝ四ひ。世みよびこゝ
ろゝ長松もうゝくゝ。あ海いとゝこの松
山ぢゝうゝはあ次とゝぱ月をゝんとはゝ
世物ゝまでとうゝひ。野中のあはゝこゝて
はゝるべいれつ男い紀とゝ川ぱゝ久海まゝこゝみ
おけとおゝげみてきゝつゝま。秋ゝぐのゝゝ
とゝゝめて下戸い鍋みんゝとゝせ。ゝゝまあ
ゝゝきみ敷かく略乃祖りゝとゝゝひ。あゝは
くまこね竹のゝのうゝき物ゝを人みいゝむ。ゝ殿
乃河ゝとゝきてぞゝのうゝこゝひ。伐士。

紀しの乃やまひとうゝこゝ海みゝ。い海い物ゝ
乃矣乃ゝゝ乃ゝもゝ。ゝゝぞゝゝり。ゝぐゝれ橋
もはゝゝるゝりやゝこゝく人ゝゝものだいりゝ
ゝゝゝこゝ本やり乃ゝゝ乃ゝゝにぞんゝとゝゝぐゝゝゝ。
いみゝゝくゝゝゝはゝこゝ海ゝゝゝみゝゝ。ゝゝのゝ紀
乃ゝこゝゝゝゝゝゝ。ゝゝ時のゝゝぞ紀ゝゝまゝゝみゝ海。
かのゝゝ海ん秋の日。大海ゝぐゝこゝに川ゝゝゝひ。
ゝゝきのゝゝれぞゝゝくゝゝゝこゝゝて人ゝ丸海
ゝゝ海ゝんゝこゝ。ゝゝ奇のひぞゝゝゝ海ゝし。
秋のゆゝべ吉田河ゝみゝゝゝて海ゝゝぱ海

人のゆゑはもとより新とんさうひまれ
たり野山の花の夜ちけぐさの草のうち
にかくれて朝夕のげうとうんへまものん
みをばばくそうぞよやまのてのあるじ
しかしふりきりぞ奇よりやくぞそ
のうきをつへをまうをもわうへがちきみたん
まうさくぢのへいへのちきみそんまうぞ
ぢとうてのん約束をかのの約のうち
とゆくとうふ。りみち新のまとうまてのうかうり海よ
のちゆやたしうん。梅づけいそまとをんてどくしのあるする
うびのうくんたしきば。りのくとうのうこのうちうたうる法よ
きねゆすん神そゆふうろん。まの野みそんつきみとり

あれのふのうやひとの秋より。わのうに家
うちうれたうをうのありしづとかげうちうかうのうへ
法とうてみとうさきをかへを。天八竹の世く
みこうしぢうこせんのいとのうちくよそぞ
ぞあうそかぢのまうちのうとあめ
てのんぢうきうとんづきうちをんぢよ
はくり琴をとうこうとうまうへぢうり
をとうゆうりのりゆ。所いかまでをぢのま
うれ方のえうこうかうえねをたうぢひ
みのんかぢかの琴ひきそあり。時うり。年
いくとせかまり。世をくのんなりよあむ。

いかへの琴とをるこがとをもぷまつ山人きく
人はいかに今よのことを云くみぷたつさそ
ねそうきんをいぷそやをきやうをんだい
こぷそのかうよちのきけつちみそのろき
ふくさをかいをそかをくちらそんだやうその人。
をうのまねいをまでをもおわをくる。
きをんをだをいをぬをれ琴云くを人
てぷをづをみをてろをとうごかすいぷろの月を
ひぞめ山猿のひとをし　まを御の糸をちりをてをつ
のをを。をすいりのまんがみをを　ふまをんをにをに似をる笛
どをくはのやをちまをてをををくをいつは笛の世ををあ
をををを

海辺のかたちけしきと。四方の岸にかすみたちこめ
たりうくせてはるのくれかたのあさぼらけ　空
山の麓ならんにぞ見なされ。紫雲たなびきたる
かりてんじめとたるもそらうるおいたる
秋の月あかりく雲かゝる佛のおろしきあふ
ぎ給ふのあさ　わづかに岩のやまの紫雲たなびくむ
世とうらくとうらくといとゝみ
うさおはくさきて稲ばかきこれをかけ
てこそ見えぬ。そのくもゐはらはぬ。ぶとの
姫のあつまりぬ。ひとりまてたれ
よりぶ。いとゞよ花おうあらわと勝ちよくと
てあらつよかゝねをぶ。ぶ。ぶのおんどうあれば

ぶ。ぶ　おりひいわまだやあ。ぶんてつん。ぶとうの
ぶ。ぶのあつまりくれむそのの。ぶ。あつきはいかうきにのせのみが
きぶ川のそふかはつべびんとぞ。ぶりふそとりのひのうさ。わるせ
こがくべさうひのうらのうまきとん　大原の里のうりを
ぶのみのまいやし。ぶ。ぶ。ぶ

乃まけちねるべーかなみいまぬねめり与
ひのえのえさみえんわなまぬまぬ時みひの真屋
みのんえうきぬ。ひまさみかざらうううさ私
所。なこの言そそえくく御まのかまでかげ逢
遊山えくくえげき春山ぬくいやまの物のと
えわもえぎくぐ後所まつりのえやーぬぬひ
くのえぬぬさぬなる寄方業かまえくへ
えぬみこ乃作与の私物りかーとえお
えーおてぬまげ吟じまえこひつむる行
乃称ひーいぬ乃作乃ひまざ物ーひぬざまね

ふ与ふ計ぬーくぬふ与ふいえとえうやまれ
うえこのわぬやぬおはまかくゆとうけまくを
与ーえうき古今乃序と言ぬーつえ花
河ぬ内称わうまぬぬぬぬ物ぬ称ぬ
ねあーもひ称ぬ。ぬあーへのはめるとぬ
乃えわうぬのひへ物ぬそぬ。ぬもひむねぬ
そ乃ひひ草のぬそ。ひっ物乃ぬ乃ぬる
みぬもぬまぬてぬ安二年正月中旬。
えらのきぬ義とくえくく書のひてぬ
ーえいぬひーぬ乃まれゆえひひるもの

ゑせうゆうらのそもあだらあ。たづまのえ
びをあ。こげうのをうきやどめてゆん。
それぐ中あをやうをゆをづくらもてめて
花軍ををうをう。印のむをがしの紙垣くき
あ郭ゑ乃ゑの所ゆをきく。ぶ紫をおりて
ゆ。ゑ白姫ををあやのむをあとおりひ
参あ作む雪をばゑ山姥ぐりさがうしうれ
うをぐゑ。霧乃尾丁かあ乃みきゑ。ゑをれ
をゑ人をもいをひ。れをゑ夏芝のか
ぎあ作まゑふをゑ第ゆ狩をを

もをてあゑ坂山をうてをうをげあを
あをゑせをを乃ゆ祥をいのりゑ。ゆをゑ萩
をあをいをねむぐをれを芝ををゆをりゆ
むゆをゑせうをゑ河ゆ〳〵海ゆ〳〵名つけて
吾吟ぎんりぐゑをうをゑ。かくゆたびうをゑぐの
をて硯乃うをれあをゑ涙のまをさご。
よをゑ乃をのゆをれ。ゆをわまばゑ。ゆをいあす
う河乃濃あて。ゑ絵つゆをれいの保ぞよ
人ゆをれをあれうをうびのをぞけりうぐを。
をわゆらをまげをゆ松ゆばをゑ。をの

花のあるひとつてゝ。ひるのうき寝ごゝの梟
つびきのこゑ。秋の夜の月。ゆかしきかぎりなき
でたゝずみ。わびしからいとゝりの人の耳
みとゝまるとゝ。ふるうらふとゝ。
ものゝ。みどりの。高居。ゆきのゝ
うのおとゝ。梅ゝ。ゆきのさまゝ
の世のおもかげ。くもゝ。ゆきもとめて。ゆき時
の。ひかり。たゝ。やたくとゝのんゝ。ゆこび
ねぶつゝ。ゝ。ゝ。

吾吟我集巻第一

春

梅がうに春そちかふ日人のゐをまつ

けさ梅みよみ作る　来得

年内の春をむまへ梅みちかそをやいんぬるかへ

梅がうにみまを春をかる日よめ

みをみて門柳乃ねはのはるをはのむもれねはちきむ月をあ

春乃うぐめのこと

はつ門をとるひくはるをうちをて乃春をとるかをうち春

年をむとるのをと計あや月のはを柳て方ゆう花らく

うし乃年は春よめ

月と日と毎梅のかはくやるを春をかをて山の草をなを

大梅くの乃いをうをひよ

大梅乃袋たををかるるん今朝大ゆをいをう茶の湯

水揚

春の三月春民まをの年はびくあつきうををのひ乃なを

うちうをうめ乃くをを

春やをいひりをを春十二つきうをいを年の矣乃うをめ迄をう

穂おりをとりて

をのこを春たちもをきうをとうをまをにあるむをを

子日

花ゆゑん年ふるかぎりにをみなへし

霞

たそむ宿の衣にかすねぶりてさをや宮のさくらむく

松風や家の衣ぬまてやうすきよ今朝の日かけそん

雪

雪はなの梅の枝にかをるかや高のをのをひ

雪もとるるもとをの乃咲をまい仏法僧や知るかうん

をの乃波よをつかと孫と雪を仏の園は

若菜

雪をとをとを宮のをの下をの宮を業孫はかをつをく菜をとをひろけと

梅宮

雪乃木宮乃筋をしを遊宮に但乃をとをむ仏ををんをを引

鶯をを

いさをうひをとけねんをを宮ゆをを河つをと雪乃水を

梅

雪をとををく雪乃花中ををを中ちを雪は菜をと明をかをを花梅

をを雪ををの梅ををををををををををを梅の雪は

木体をを梅乃本をををををををををををををををををを

雪一雪をををををををををを梅ちを宮や小野乃つををををを

柳

ちとせんの山々の河瀬の糸柳 緒をたれて流るゝ色ひく

若草

かすがやゝ野の宮ゐ池ゝつあそびいまゝきとらとゝあ

早蕨

春風ゆあひせてまてやさゝ〳〵のてうちくとゝろいく

うえ岳ゝ〳〵ひゝ雨の物ゝ行の立ゝ岳やけ野やあくのた

木目

春雨い文乃ゝ行ゝ世ゝ樹ゝ〳〵の目ゝ世ゝ〳〵に岳ゝ世

春月

宮のうゝ合いひ岳ゝ雨ゝ月ゝ月ゝ〳〵ゝ岳

春雨

岳ゝ木ゝ雨ゝ乃ゝ〳〵ゝ雨ゝ世ゝ〳〵ゝ雨ゝ世ゝ〳〵ゝ雨ゝ世

宮ゝ世ゝ岳ゝ宮ゝ乃ゝ宮ゝ世ゝ〳〵ゝ世ゝ〳〵ゝ世ゝ〳〵ゝ世

遊線

ゝ月ゝて世ゝ宮ゝ乃ゝ世ゝ〳〵ゝ世ゝ〳〵ゝ世ゝ〳〵ゝ世

春駒

いゝゝみゝゝゝゝ桑ゝ世ゝ〳〵ゝ世ゝ〳〵ゝ世ゝ〳〵ゝ世

雉子

春日野いゝゝゝゝ

素馬

[illegible]

海馬

[illegible]

花

[illegible]

桜

仏母院桜（ひゐん）のむらさきの間をとおりふたもとしら[illegible]
[illegible]
[illegible]

家桜

[illegible]
[illegible]
[illegible]
[illegible]

ちぐさのはをいろいろにもみぢせるなかに蛇梅の花

大梅

ひてらまてよそのやまかの大梅をかをりのこしてかの山

ちを深くそのかをりまてといねさらぬ春のむかしのさくらかな

伊勢

いせのくにの花さく山のあなたにあるかをとめん

鶯屋

春のもりはるかすはらの梅の花ねをのかけもえ

垣竜

うちうへくみきるたちの垣の梅はれもかてとちるかな

若狭国多田梅

なんのうてはるのかけのみやきいんかそこれのふるさと

素堂

白妙の雪をけそもむろの花をきて雪のいろをあらそふ

物さびたる立とそのそれかの九梅なるそ伝たくれ

ひのまへそ天数のひのまこれかかそ地ろくそやせろつこ梅

素雨

のうちのたびのうつふきそしおきのりのたんれの梅

峡水

峡水のけもんのむかしをくそ仏の庭をそおぎろくれ

はせを

ねひくもてみのもろくかれい素雨の京をやうけしたかの

はぐるまよ

苗代

苗代乃ちゝ孫たちうえむりと今に残小田まき

蛭

くちなはのなつてかくさりまけたかえり軍のあけたなり

柄朝

唐乃汁黄乃酒のむ杜いの色と長乃海色そまする柄朝

海棠

法ゆかしと笠ゆはたきこおりゐの海棠そうむのち唐多

小梅

わとえて小梅のむものひとをけんたりわれはみそ

小東花

うまいきね色いまれ神みちわまそう小東花むのはなくさけて

沉丁花

竹垣と霞乃きねの梅ごあて白ひとわむ沉丁花

ちゝ叩けの花

こ初乃家は房とむと房すう紅花房乃房乃房毒の紅

もくまんけ

紫いおつれ地獄とうふ必ず色て青みあふりく連むけ

杜若

沢色ふくはといかひてむ地獄の梅くやん色房と見る

うわよみ花

躑躅

さくもの月にこゝろの色かはれるを見て

山吹

ひとのくもりて咲いそぐ色にさきをる窓の山吹のぶ

萩

うゑ置のもとをかきまぜ撫のうへの萩とかうあてて人をとゝ

奇人の中をもあそこへとむさく萩原の忠度のたけ

松乃若みどりと

いちはやく今日のみどり立初て松のとしをいのる

遠日

なつ来日乃屋敷の杭をさして今朝はるの門ぬれ

芭蕉

もゝ引てもひさしてあはれ幼き蕉の葉の袖のひかれ

百姓の門芭蕉の面やきねくよ蕉と言の神ゆ

長吟我集卷第二

夏

首夏

春過て夏の日新まるねぎの衣ぬぎかへあせのかさね

新樹

もゝかゆか鶯の尾をわや梅むちるこゝろゆる若葉
ちとすゑの緑ちさそひてそよぐみそんなのびうる夏
あをゝ

卯月

花ちとゝ月末の花ちるゆる若根うつ本の打ちかれ
ぬうと

時鳥

毋てこい橘の本民の橘いてかつ元月山ゆくこきす
鶯のうむてふ脇いかゆるあよ文あてあるを鶯かとこゝ
郭公なのまりやゝ法池と金ちんかぞんゝけ高一枝の内

早苗

うゆかとて五とうゆかすゆ人みとゝ山やとてうまとゝいの高
世をを

蓮

植とおゝ行つれもの氏とくいもてあひのうのこゝ
ひ

菖蒲

ぬくれ身白ひとゆめてしがゆいてるたちゝ助のゝ沢てひと
めく

菖蒲

[illegible]

六月晦

[illegible]

為霧

[illegible]

鶴川

[illegible]

賠射

[illegible]

數寄屋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

蟬

[illegible]

蟬

[illegible]

鼈麦

[illegible]

夏草

[illegible]

夜ふかみ　ゆめ

ゆめ

ほたるやはらしきをうかのこゆりひろもをふみとよ　えます

きーのくる

つゆみるもうろきさかりに　袋　小

ふ湯巻

若のうしくはくを　ぬぐさいの色とは　ぬぐいの　わ

ひかはむめ

とりらあくつとり　ぬ　ぬ　ぬ

庵とゆる平砂月よ夏の舞おそくとこ河ゞとひらゆる

夏歌

宵のきゝとゝ河つと北もゆふつまゝ入るにゞゞ夏結布の

扇

ゆゝ夏色又ゝゆゝ物まゝゆゝ命にゆまゝとゝゞゆゝゆゝみあふきゆりゝゝ

紙蓋会

精舎ゆゝ流月会常と安清の高やきゝ高りみ吹る紙

泉

夏の月ゆゝ家ゝとゝふ泉ゝゝゝゝみゝゝとゝふゝゝゝゝゝゝゝ

物宝

ゝふゝゝゝゝゝゝゝ

吾吟我集巻第三

秋

秋

秋立日よめる

立ちの風たちや吹そむ山松むしあつ〳〵袋のをやとけわたん

なねうの日よめる

長月乃なかばとひさくかつらんたちそ初るまに〳〵ほね

七夕乃宮ぢのひらあゆゆのあひたつ

むまはつたに

いろくみち山とかゆる天川いそやとるむまゆりあるらん

うゝ垂の月ゆみとりすらやらんあやめのたあみはせのあ

おゝりとりんそ

かけらもてあふむたち月みさゝ山ゆゝりれたのあれ

お撰

ふみあつとはひらたゝ三代のはゝとそれそ

家

乃ゆきあくあはとゝあはとゝ山のさしやそさそそむは

きゝ山のもそ結ふわれとそ家のむしひそひする下わひ

秋風

うゝ垂の月をゆ山ひ時の月そ物の一ふとそ

萩

二りんのはぎいつまでもはのうへにあつまりたる

萩

家にいとむもりたるはぎ

旨人の園に植たるはぎ

女郎花

ものいはぬ中人のやうに男山にはのみたちくらべかな

藤

をのえのはのうへにまとはれてはるのまとまれくるしき

藤かな人とうらやく

野人の家にあるふぢ

蘭

秋風山のふもとの吹ぬるとそこそはなるふぢのうへ

あさがほ

あさがほのはなのうへにあつまりたるつゆ

秋草

かまとの本にむさくらひあるのわたくしの秋草の

秋風に袖ふるとてさそはれてちるはなびすの袖

木槿

うのはなきむくけのはなのうへにあつまりたるつゆ

かるさわ

叩きなとはなしてきかくよ夜の雨まよはなこ

まちの雨

草

何とかもけぬらみなんうる紙のおけうちのなさへなくく

菓

けあぞうる翁のひとくに柿くもきて夜の雨ふりやあらの実

秋田

山のれ信ゐ秋の家ねまてがさりの紙やぶらむ

柿素

ちくるみかあひとそとは月のうらけろ〳〵男成もひくゐう

野分

野分して屋風ふとも吹きとうむむ〳〵ぶ紙のうへあうるり

寄

山里のあひれ色さるものふりなきてとりとりの秋ぶ

出

陶器第の紙てあるとうきりとて吹させて子第のかけ

ひびもよかのいろ第あきて柳りてむとべはたしの山の

うさうるのけみかて雨降ものあ雨ふきれるやの人門の

屋

清掃あもあねうれとうり一所ゆみはるりて夫婦天使

なるう

[illegible]

鶴

[illegible]

鴨

[illegible]

秋鹿

[illegible]

月

[illegible]

八月十五夜

たちわもゆうて　こうの
のこくひくなうあおわねこくひとう　大食　ムクリ　月のを
賢月のうつ男みむうわとこうひや　芋　きねあうそん

九月十三夜

伯母　とも　そ　月八十　八　十三夜　とこうど　新乃　似　うるめい　月

廿日月

かうしまは　廿日　稼　ぞ　みの　そのほう　今　夜の　月の　ゆうそち　いさき

簾

かいうあとかさて　あうふ　男　夜の　ちわ　ふ　乃　ゆや　同定　そうけう
はまよらひあ　中　人　所　ムの　下　のみち　簾　のそて　ら　所　綿　ちや　ん

弱足

ふ　ゆ　の　う　ア　ま　ア　本　首　地　ら　ア　て　む　く　弱　の　ま　き　ゆ　る　髪　を　ら　る　ぜん　やうあさ

搗衣

う　い　つ　ら　や　と　う　き　う　の　さ　和　衣　き　ま　き　ま　ま　ま

紅葉

六位らの五位ともやのもみぢ葉ぬ山ぶかみ　秋

山ぶかみ一本の色紅葉やおく山ひめのぐふうあの月色

霧のたえ間のぬきてはくまりみ文ぬ一本くの　ふ文

杜紅葉

杜しけく柿のはさ紅月色まそみりみちてさら衣の森

林紅葉

林乃月酒ひるくあてのむ一にりみちいうけの色みいてさら

柿紅葉

いまさらの色やそらく柿りみちぶ紙いるよぬくえあ作く

深紅葉

やよ河面花ういぬ色をたのむしさやあるさうすきう河　紅葉よ

蔦紅

くまてし紅紅のはさまの紅さうや木紅葉ふみつむ霧の色　む

九月盡

九月色ぬまちくて二寸の光信ひきさふのつごさ

吾吟、我集巻第四

冬

初冬

小春とて七月ばかりなる心はよりわる物やあれぬかつあ

時雨

ふるとなりとやもるく富かとが月をげきこと富初時雨

長夜

長夜板屋の時雨ふる秋寝耳みるの人やらと富

落葉

木すゑとやもとやこぎにくふしのあ富と富森の落葉

吹風乃ものやもとつふんふとの葉乃ちりよ

をのはらく木枯吹そそて若よのこゆるる風の秋

名月

ゆりの富家乃はるきみあてらまてくるんのぐ本之の名ふ

月前

つ天乃ら小一すゆ秋富者の家乃みいみえまの月よ富ら

家菊

山人い名そそひらさ富ゆ之とんゆ人わ者を乃かわれとあ人

家菊

人ゆ〜い師乃といるん家ら乃まみ木ま富とあ一の秋色

氷

河ばたのたちぬみのびねまこと名をはに宿る花の名
かりそめ手洗橋の音はひろひろのれとやれりの言げさ

子ゑ

立沢乃あやふ小神みねんてひさも浦れてひく行ちとり叫げ
さすれごとみかちねもあり音恋い友よと宿てふ波のるぶ

ゑゑ

行川宿沢みけ今一掛ようそ為たるゆねをーのけろ
うりおちの数みれちくく薬豆いとやを暗の祈手ゆるん

網代

河乃名れらぢわ宿人の風信そて網代なのれる氷奚のゆさ

名月

さゆ宿根月乃境のかるれれゆる宮おまと月をもしろれ

霧

うきをの家を吹けくれゆるあまやくをひやを密業

宮

おはるる宮をもめそーもをみけるまん人のひとものり
ゆる宮み大日のむりりれをかまこら宿本みもむ時ぐり
ん人ーおくく夏の宮けいゆせやかひる宮よのつさん
板ちらこぐくみそれの作るのもれ仕法やつぎこふれる鉢宮
宮さ形よゆる付小麦の形宮やゆるひくもゆもまもしろ

ゆうぜんへ宛たのやとうしゅうさんとゝまきて

寄物

一月九日ひろけ殿あるに本居宣長をあるて

花のうゝ膳みて宣長のとりえるうちやたひ

炭竈

部人業門湯を出せ小脇山のとみやく陽に下火たく

火桶

抱て寝て寒さをぬせくゝ火おけそ、かさひね秋(よぎ)の寒(さむ)

食

ゆじき秋萩の下にめをあて度稲の穂ゆらそ

仲秋

秋仲秋月ゆ秋ひくくふ山梯の羽衣の

仏名

末世をゆじゝ仏名たくの仏名ゆるのうん

冬梅

白のうち先ねけ出て咲梅はまやうゆん

冬年

年寄ているけの山の冬ゆ松かさりせは長ゆうん

大海仏をせくゝ為ゆ年月かとをゆ山ゆ

老後冬年

人貴と雲てなれぬ年のはゆひわるりの身とおもはめや

花の卯にをそ忘の月日とかそふるをそとうるのたらるうん

節分

春なれ共よみ出きるうるまめを花咲の時とうそ

除夜

幼うれ共矢さをひたそれ共ふるわを過年なのねたらるこ

小

吾吟我集巻第五

賀

寄月祝

心ゆるすとてやそなたの月ひろいにけるこれいかの

寄月祝

代をかさなりの天下一ちるみちそり月よ君はいせい

寄海祝

河の海入潮をめくむ君を船にのりて浪を高むる

寄巖祝

くみて高きのみちの内を石いて高とありてちんをあ

秤

寄松祝

いはほちの代の数とうにをれ雪と実ふ人の松のあを

寄竹祝

ゆしをもおさ海の代て国くの太竹の根とかくさね

寄霧祝

千年のよとひとそなる明日を見あけたまてるとの月

寄亀祝

亀の亀祝

亀の亀とやとは数の方冬年とこそふ亀の代

寄民祝

佐年に服の如くる世にあへて天下たい高と国土第民

吾妻歌集巻第六

恋

初恋

[illegible]

[illegible]

[illegible]

吾吟我集巻第六

戀

初恋

なりひそめくいなりんの恋衣日らわゆき神の河ゐる

忍恋

ひとしれぬ思ひ乃人めをつゝむとて恋ゆるを荷よこ所けん

同恋

ものゝきくえうわみくけて思えんのうとさわつ耳ゆび

見恋

小倉山のゝ[illegible]ねかひやまゆんゝ乃宮み月乃欲と宮ぎん

換恋

ちきりとて河貨(とんそう)とかがらんのようけどひの日きりのど(ちそえ)

待恋

まつよひの更けかたあきけいるつねははくとあるく

逢恋

だきつきてこそひい給とあひるせわのようかんといひ合て

別恋

今なほいとの結そめけるをねぶつれいるかく

江朔恋

とうまきもの拾ふひるとうろ髪と朔ちくとあるひみうろ(海)

訓恋

かるるきはいろ稀とそ楠の海ゆ必ゆけるねわの中

恨恋

わるいなみ恨いもうの中へあさすへのあ海をもろう稀は

片思

恋ふぐやづつきやりはるらんな身をけるとうれるひ見ひ

逢恋

わの中いとあれ恨やゆわひをせて、ろの紙の稀とのまて

変恋

とひや海中いるけきたなかふんそくれ恋脚海

空の月 哀

雲ふかくとこそ思へすみ〳〵照月のかつらこい恋のうら〳〵に思ふ

空の星 哀

隠れなるかのよどひいうやまい行末の人とあそねるひく

空の風 哀

えうとうすきゆみ〻ゆ人恋のひきやとうく胸をせう

空の雲 哀

たのめ〻〻雲みつけて月日をもれたそ行のきうんのそと

空の煙 哀

紙と人行くたくるゝ煙みくすすへうかうそいぶせうれ

空の雨 哀

うゝ雲のえりるとなく称といとうる身河はあみ神にねれうり

空の水 哀

底まうゝわうけとけめうきゝへたくあうはけうゝの形ゆうる

空の山 哀

いかゝくうせんのさ恋信流空あさ雨ゆう思ひて

空の野 哀

ふけき事ぞうら雨さうんむけ形みワう哀恋とかわてうべ

空の井 哀

車井戸のけうゝ乃縄の一とうみ明くるあゝとめうるとわゝ

家潮忘
うきこゝろ成やくに耳をつけひそう枕をあてさつ用り
寄門忘
いかにくあひてあ門の海ちとくんつゝ丸今とこ海ろん
家渕忘
うき家門渕みこ海りくたれ人やかいきそれとてあ丸あるあき
家巖忘
おのさみあこ忘ゝくとせこ人とも人へやうこゝねいこそかあるこん
家橋忘
こひ川角こそこもひこ人こゝまきみ人こゝうけく忘口こる

家里忘
みちはのあひびの行もものこひるこ人間このこ丸里や出るこき
家戸忘
ゆるゝやゆ今宵たのことうけるとるこ書戸丸さこあひあるや
家傳子忘
行やの門みをきて白こてそこひとりぬし間傳みそうきあるこそこる
家庭忘
ひくみ人まつ庭の寢しひこあ丸こやりてみこあこそかき
家垣忘
かこゝせこふひもものきたのこうきあ里こうあるこのんる

寄れば

住吉乃きしの岡せゆゑみ移ろひてやまらき人へまつみれのうく

寄竹

あふさてもまさるこゝろとなねゆやまみたきさらす物

そひ物

寄もむ

うき人のみあかしうらそもむなるあんそんのあさみうらふ

寄菓

人ゝどゆんどゆくせひとゝふ物の安間みつけくもれ味のとろろ

寄蓮

かくえあもまもすもむのとて蓮の花のくみうらけうれのへ

寄鶴

うきあみ身いとりもえねつゝも鶴花うらうら男ひとりのこ

寄鳥

そひとそねうとれとかけく暁みやもあう沢のかもいはとて

寄鶏

暁乃ひもかけそ鶏とれと乃まもけひとやあ移なう

寄鶴

花鶴の鳴いの下に年とかうね恋子沢安間なひとあ間き

寄獣

一とうみかびきもとそとけうこの皮乃なでつはして

之のる之

はたらく之てみひきねうきの人乃物乃ら徳そくや

之の牛之

いそけとも人の心くとゝ称りしのくるまもそくゆそくひる

之の嵐之

吏ふ和い称ずかきとくわからひ人乃ゆとひいそらえん

之の馳之

かさけとゝねをたゞへみでゝちそくこあゝとゝ称り

之の猪之

うゝきまいゆんされきちけゝいとゝゆゝあゝあふ拍せんか

之の狐之

之こむとゝひゝ和とゝにゆゝるとゝきのまね狐ゆやゞゝる

之の狸之

うとゝゆゝといたねきの穀おゝふきゆゝうゝくはなや股のゆゝん

之の蟻之

つまゝゆゝきゝか之のゝゝみかゝ之ふゝゝきゝ之あひゝ之の陰

之の蛇之

ひ之寝すゝ之ゝけゝりゝひゝゝゝゝかゝゝゝゝや称せゝん

之の虱之

ゝゝゆゝゝゝ肌ゆゝゝれねゝゝみゝゝゝゝ

[illegible]の絵 [illegible]

[illegible]

[illegible]の蟻 [illegible]

[illegible]の蛾 [illegible]

[illegible]の蛸 [illegible]

[illegible]の蛇 [illegible]

[illegible]の鼠 [illegible]

[illegible]の鯉 [illegible]

[illegible]の亀 [illegible]

[illegible]の貝 [illegible]

[illegible]の鯉 [illegible]

[illegible]の目 [illegible]

[illegible]の蛙 [illegible]

[illegible]の蟹 [illegible]

[illegible]の蛇 [illegible]

[illegible]の[illegible] [illegible]

[illegible]の[illegible] [illegible]

宮の葛籠 忘

見みのひのかなあひわるくあいたる一ぬきたらのゆさんかう

宮の枕 忘

おりふしの寝(ね)ぶるみいの袋ぬのの枕やもてに忘をきたらん

宮のみ 忘

みのてのてのてのてのてのやかゆくたりひまいてせそうと中を

宮の むすめ 忘

楚の国とく今はむすめよりときくかうは後の絶文(ぎょうぶん)はせん

宮の 法 忘

[illegible]

宮の硯 忘

あびんせきれの硯の箱に水の滴のこうさ

宮の筆 忘

林のみ毒のひろう麻の毛の筆いまさんとき少文

宮の刺刀 忘

今うわ[illegible]硯みのつれのみ[illegible]ふまりくわる[illegible]

宮の衣 忘

う衣うみく紙をひきさやもふ[illegible]ひ

宮の猪 忘

君きての[illegible]ひ[illegible]

空の笛 忘

竹の時の神乃なさいかるぎてうく乃笛にねまそかんもろ

空の袋 忘

うきさひゆみぬくに小袋のけてとかのているもそろ

空の布 忘

布のうねりのうちとろくひけ沈くなまりのに拵ふさ

空の紙 忘

あるのうと十をつとへいかねをもまふかのとみるつきあや

寄屏風 忘

金にめとて母ふ心ちかくれゆゑ勝ひ屏風とひくうるみ

空の扇 忘

妹きてんれとしの風のけくるの人ふかきかつれせち

空の笛 忘

口のいきかのうふ屏やといふく笛の音とかきりに来とうたん

空の琴 忘

とをひくしものをゆううきかのあうとかのとをようさん

空の鼓 忘

いつまてのかく打すてときけとの次と言つまよ忘

寄た鼓 忘

まゆみさくとたの鼓のうつけよもんくあんの行ぐらや

之の表紙

楽しみ行く三つ子うわよ孫ちとつきあひてと表紙こと

之の羽六

ときめとちひ孫の合ともはたちさいそひすてあるひとち 孫

寄れ猿

下帯にまさらつつねワ手ちうとよんねワてもちよ

寄鞠

下ひまちよりてども表紙を遊中にたれ見ろ表紙なるさ

寄矢

はづみ矢ありまさらもとはきんいふとかゆうへのん 孫

寄鉄炮

てつてうとあ面くきてもとるるねいはるぜひ式たひ 孫

之の弧打

表ととれわひはるたワさ内のつ表ぜまたんれさちう

之の刀

思ひとみて思ひき面みもきこれねんぜ表ちと出ちるさひ刀色

寄長刀

あ内はいやちとあにたワ内はねとつてきるきるてわひらひ 孫

之の甲

うち面といまんとのひ表紙ときて孫うん表紙ちと思ひちうん

雲香丸

ひしほみそ豆腐の焼きやらるる香とるべしとそれんはと

雲の茅丸

ともしたい、その出るの乳の毒をきれ茅のやまのたびひ

寄膏茅丸

地乃宝につくりとかたうち用れかうやくれども和もとれ

雲の酒丸

男ひみそ豆多みもみそうち汁丸ん酒小そのとへ乃とうま

寄餅丸

行ふて後れ甘ひたくさたく餅ちきりみつきてわらのよ

けもん

寄饅頭丸

ちくわとも和みもの海いまんちふれあん毋お毒乃ちの粉ちふ

寄米丸

うすのきけ粉とこあ粉つきそそこねつくとゆれとそうき

雲の味乃丸

一粉乃 紙豆みそ乃毋のにのまそとやーきわとひする

雲の塩丸

ふかまつの国のしかんなりひそてかくを人毋男ひそみ

雲の新丸

的雲のゆう男ひみくどそたみそ紙をたくうねつのあけ

きん

寄合恋

人をもうらみぬるかなゆのときかつらつゝわとこそ思へ

寄鐘恋

行くへのしらまほしみかりくそふあくそれ物思へとうき

寄茶筅恋

うきゆゑよ茶せんの竹はかいもとわそ袖もまくらしく

寄柄杓恋

恋ゆゑとつるきさゝ人の笹ひさくあまとをみくそ袖

寄桶恋

中絶はたゆひさくばかりあれ桶あり所とかふそこいと

寄盆恋

いそねろんはとそらくぬ墨染つ花思ひけわさ袖をとをる

寄皿恋

恋ゆゑつまし人の一重をえてしうかも色かはりそれ

寄四恋

色ゆゑくゝとは思ひそめつはけりさに忘れねわのこゝろ

寄打敷恋

いひ出沢人のかゝるの色乃色にてそわんさうの色あきの

寄火恋

うら恋乃やまひと消もる炎をてしひとやく火を袖の

宮灯炉

いまようとゆふるうきのありわけまてにかげそへて

宮の蝋燭

あるかをもりもあるとも蝋燭のおりひしろ風ちんの風さ

宮の地灯炉

あやうにわひかんとあらうらんの内のおりひめかとのめく

宮の長笠

ひわまの波乃あるかをもりもあるとも蝋燭のおりひしろ風ちんの風さ

宮の履

あうかうかうかうのあるあるはるひかりたかをたなかまり

宮の提

堂文みのうひうちてうの紙かをうら傍乃ちんきいさうひ

宮の指

ひうねうにうるうい指もかれはしるひうねうと乃おも前と

宮の車

さ一面とあるかうんやまを車うの風行もひくるむうまと

宮の船

ちりひいうかれてうつむ小舟うるうさ前のうりうち

宮の網

だいうちのひくるひあうるかうんやまを乃ひうねうるうる

宮綱忌

はるかなるみちとはしらねどもこゝろ

宮仲忌

ぐそくしてむすぶのかみのしるしとは

宮の仲忌

極楽もいまはこゝろにうつすべし

宮の殊教忌

道心をとなりのひとにとりてこそ

宮の聖忌

ふるさとの花の中にはとしたかの高野六十

宮の心伏忌

待つひとのかへりこぬきぬをこゝろの心伏の

宮の若宮忌

ふるさとのみかいとをもとめてちぐさのやくそなり

宮の梅女忌

船遊ひとうれしきなかれのこけたる命をもとくちりぬる

宮の醫師忌

人をもこゝろのやまひとなれるいつまれ醫者かなさるんかせん

宮武士忌

故と伯民者のこゝろをわかる命えあ事とうそ

宮の宮司殿
見とりの中うえ[illegible]ん[illegible]たのみをけとも[illegible]
宮の番頭殿
かどらーきんの[illegible]きゆ[illegible]まろくけでん番頭もか
宮の祝殿
くろうもんのまさこ[illegible]ぐふかと称[illegible]あんの[illegible]
宮の神官殿
つまとのきんいん[illegible]のあすこ[illegible]あひそめんにとのびくはいふ
宮の延宮殿
よくけあわまのかるとや[illegible]ん[illegible]むゆ[illegible]
宮の推文殿
おりひりのこ氣をけてもらうそのみ[illegible]をとうてをうぶへ
宮の松人殿
心のき松乃なけきれ[illegible]にさんあり公義れあぜ[illegible]をきけ
宮の高人殿
あきんのこせいりんのたうひとふまぜ称とせ[illegible]のかひと
宮の唐人殿
見いかとやらきん唐人もかうたちあれ[illegible]
宮の盗人殿
ねとんのかやたち[illegible]ひあるとき一後のひら称

忘雜

[illegible]

吾吟我集卷第七

世話

[illegible]

まへてことさらにゆひ垣ひめやとをくやまをて後ふと
よ流ゆきよがてとまるとえかつ鉄炮と人乃きてわ
ばとの知恵行ふつきわるたるさよ身ゆて能ん仕とをるとも
代かてめいとつきわる勝力けれと寝ん身乃さしわらせ
料理てゆうまん所まいたいせうに麻とむめと今もひろ
朝ふみく尾とをてさすれやるつくんわる見ふうかだう
わ孫ゆうもなるこみわつきうい、ひきうもんすう和書ゆ
かゆきかくふうそかるうまちもめをえかね今のふ月ゆき
ろひつまくはりさみ所かうりの孔と言よわるたびひ
偽ねのそく武者といるるを虎ひこつうき語るとう史

よがいまて見も入るうあきふひん親のゆげとなびよみて
にくまれ子世ふかるてふたひひ敵ちてとにそうあ行
立ろうい大本れけとあら推の格とひろ所猿かこさ
人乃ゆをちるとりとるかしこ今やるふるかさあう嵐簾
猫のくにかこのこきれくふ蛍を虎乃尾とふむんるるし
世るるいそそうゆれと月の格ようちんるひ人もあるそう
あ家れねかといあひし今まいると廿日嵐をうちるあれ所
ちやしともうかうかうそ所けがえ木うう落さ所猿ふの藝
かふふちだくふに乳とのまとれと親れ美姫まとおうう
ふんさうね世子の親の世りかんと射と格ふやえるふそうん

親王や天祢まいりとて四日こそ牛にはしつまじぬいるつれ
をけをとりよりとりあけさわぬよ宮日なれ尼ぬをてもれ
分をつくて人のいてをと庭のわらさ宮男やひとをるん
けをうふく人をものよをすたくれわい猫の孫とをもたるろ
やきるに色とをいいと我らたく猫をたてをはきんをそ
かをつ〳〵なををうけるにぎんをれ大いをけく人よかをつく
つよきかをに助をつひわるわ奉をそかけ宮るにをむちをち
をちうらを月ゆうゆをうらみをれ恭おやまをいれををすを
双をのをひうゆいさいの月れいやをとりをそを宮ぐんのうん
かをとまをぶをとやいをんをわをすをもれ色をる袴かををね

落武者やうゆをうを宮りうをを乃ををまふ風信をるん
鶯乃をぶを山鳥のをうすをとをがりをひをやををいをを
鶯をわをに鶯をを加をを宮ををわをを一樹をけのをひやををふ
みををぐををりををるをりをふをを福をををるをれ
墨をれをみをの鶯乃牛ををを鳥乃加をを紙ををれ
中をををやをうををきれをの雲をいををかををををきをれをりをひを
きを人をもをりををきをを琴乃をやをかを宮ををひををををををん
いをうをちをみををの宮をを宮を沈をを宮ををりをを川を場をを見ををりをと
消ををえをひをををを人を行をををもをををををををををををををを
ひの新乃一河乃水ををうををひををををををををををををををを宮

やき山乃石灯籠の苔目安間寺乃門もあれかくふくろ人生
見るもまれ目ぬとも命次第ことも流耳（かざこし）すて落口すまろ
はぐるとをいふれとをど唐ぬとえもねくや故桃まろ乃み
出家ちとへまもやさ先乃矢こやや人のいちせあそん
死とる身のやもひ見やまとる西金乃命とろよけても
酒や中色金とまふりかあと正月とゝの菖蒲葉にわふ
山人乃あるよもふる若あひの小むときけて出色ひふ
世中に男ちんのるさもひもとうもとうもとう

富士山をかゝめて

ぬりとをいかつちの天つはら富士の山

富士山の腰ちうくうにうかぶ雲をねきさけるん

ふのけむりのなびくねりと富士のそれちうくうにいさやかに雲

けたゝ山々加やく煙のうちにて

煙の中のすそをとりさげて三里とやく色あり一たの山

のびわの色をうつす富士の孫の腰たけふさとをゞこりて

吹上の六むれとてふとをちよりあるわしも風

そけしくてかうりあたらそれん

むらの風み涙のまさこを吹あげのこゝんまけゞめをふきそう

田子のうゝまて

とゝひのき煙うくとをゝるゝ月のたゝ孫と四とのの塩釜と

清乃うさゝちとこ保の松ゝ乃とりて

真わうとゝ乃松そ人とゝ乃清乃ゝ南乃本戸粒ゝん

ゝ乃ちゝこ乃ちゝくとをいて

ゝりこゝとを遠ゝ乃ゝ乃ゝ乃ゝのけつまいきそやひとをちゝん

宇津乃山とゝゆゝとて

のとけ乃ゝ乃ゝ乃ゝ

ちりのとまりて
入ぬる夜花ちるいろも世を年月ふるとはなりと
のぶ三河ものがたりかりて
春の花ちるとぬとまて夜の月あり田のまへの梅の香をう
春たてるいろあとをるるや武蔵の国の境の渡りとりて物
笠寺の乃くるんあみまいりく
夫れ色法ちりかるみるりぬ笠寺とかいていきん
伊勢のあみ四変の仏つきくあり名をたた
つ称あひて和ひとよ酒のこゝろ
しむ乃世ゆるうちあ名もむ〻しかとこれ友をあひ
伊豆乃わるみ〻湯治すりとて来かとゝいふ百
とゝとりをるとり
猿乃井ゆみ色や前のとゝゆるかうゝ国れや来かの里
むさしの国延命寺ゆく童子法師乃本
像とかんて
見涼乃若をまねれく円涼のとるかゝをそゆ〻毎之
統波乃山ゆ落ゆくもふみ乃ゝぐといひて
鯉乃おりくあり渕とみく
清くちゆ乃ゆ色落ゆ国みの口ゝ鯉て清りゝく渕と必

石山

男山むすぶかりかねれいそやたちむといそんかやたち
大江山いく野乃道乃ふみそれを暮ゝ(おそ)ぬ(ぬ)とてまさふこそ見
橋乃巣をおもくなけわるゆへよう遊覧と月乃ふとゝろめ

石坂

ちをあつていたりのもとそつきにそをうすひの坂をあるこ
人

野

源やすをの巣乃巣巣ふをそらて天地和合やむ所の原
むさし野とうの富士をかうあて
遠乃名ゆかれ武蔵野とに富士をたゝくい巣巣の

とをゝ一ゝとけ乃野かゝけ乃ゆ桜ゆ臣花ゝとわゝんちゝる

滝

山乃ちゝに風一おゝ乃さゝきて龍の滝ゝ乃ゝ月ゆかんあ臣
清水乃岸巣のうゝゆひきゝりかゝ乃ゝ乃滝ゝ乃龍ん
山桜乃とけゆ乃ゝ若花みたゝをたゝ滝乃ちゝ糸

岡

やふれすゝ文字にけとゝを抜ひゝゝるつゝゆゝむ所の岡
ゝ乃ゝまゝそ人をみちひくなゝれゆの名ゝを岡の池蓮乃ゝ
岡寺乃門おゝれゝ今ゝとゝをゝゝ屋ゝをゝて小所ゝゝゝ

川

げつ　ぜつ　ぜつ　ぜつ　ぜつ　ぜつ　ぜつ　ぜつ　ぜつ　ぜつ　ぜつ　ぜつ

江

朝霧乃ひまゝ　ちらんれたる　やうすきいきの　雲の江

浦

名ゆゝしき　風乃浦乃　むらさきの　とぶとゝ　やうに　雁

船もて　行海乃　沖なる　奥をひまゝ　ふりにそ　行乃　とれ

涙

あさ　ぬれ　たりの　涙の　ゆるゝ　かけ　や　袖乃　ねまを　くれ

滑

かゝ　滑乃　雪　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ　ゆ

鴻

景ゆ　と　月　雁　へ　ゝ　に　ゆ　ひ　重　ゝ　鴻　ゝ　き　ら　鴻　の　名　ゝ　ら　ら　を　す

橋

心かけ　し　佐　舟　乃　舟　橋　ら　ゝ　ま　く　な　そ　思　ひ　や　雨

扇の芝を

れ　設　乃　ゝ　ひ　ゝ　ら　か　ゝ　ら　ま　と　も　扇　乃　芝　を　名　ん　ま　り　わ　る

星

山　松　乃　こ　ゝ　ら　乃　星　を　馬　い　か　を　と　ま　ん　ら　を　き　み　ん　か　ら　ま　そ　そ

河内女乃とわるもゝんのゝ　ゝ　ゝ　

そつ孫きて弥色ゝ[illegible]枚の門之輪乃市[illegible]酒を[illegible]

吾吟我集巻第九

雜

天

あきゝけゝ月日ゝ[illegible]い天の[illegible]下界乃人を[illegible]

[illegible]

よゝこゝろゝ天の[illegible]れゝ[illegible]ん[illegible]の[illegible]よひく[illegible]月[illegible]

風

めふみゝねゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ風のかゝらゝ[illegible]

虹

たゝひゝゝゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]ゝ[illegible]

杜

末をんなとをもや男の女の姿小松をもくしらもしらぬ人のゆかりを

竹

ふる雪の人よりをもをや若竹のとぐかをの神のあひらを

若

びろうどのぬらんとみてとりしき雪若を造とかりいひ白む

鳥

ゆくりなく雪のうへをかうとりとりとり

むさしあぶみ　ちかのうらにはくはるることゝぶねをはこぶむもうら
名のうらくはよ　ゆぶねのいそたゝねらぶんぶん
きみとうつゝきそぐ　狐ちそ池のむ藻のまへとかるめ
ちゝはゝそうて　西程ものつゝ月ふたるそもや明皮
糸つけ　よろひの猫いろ　やうをんのかゝにけても人ひ
獅子ふんん　虎乾入　ものまひねんおのたくひのうぎ
猿猴のよまつゝ　きぬ　ひれみかう　ものうのちろきれけ
もとるむ　虎乃なめふんそのこの事　墨　形の風

宝

ひとるくゝ　糸とぐるもそ　さかるの　留の家　やこまいかん

地ゝ　ぬきてまいれね　蕪　そのん　岸　称　よこけて　行かろ
ちけれるいむつゝとそ　や　村　かゝと　のけ　のそよ　ぬきま
くらのゝ　花　との　行　花　ころひと　作　よね　そねけ　ぬきね
演乃　多い　ものよ　解　ゝ　たそゝん　さみ　ぬる　もとあん　のかる

貝

はのの　の　郭　ぬのみ　のゝ　ゝ　ゝ　

ぢぐく綱ふかう侍うきわとんぢまとおどさとりえ侍たこの人

櫛

めふたとねおふくひぢく手もの羅ふ人の一ひそうき

合

いのとうるとおるひとの紀寅のてちかうるぎにもそれうん

鏡

ぢ乃国のおふんぢ手もかのくやたうふ鏡ともわとふん

秤

今枠とうきかうきいめふかと秤身ぢやとのうとうう

鏡

人とかて人い人とたうあと人らそ人乃人よかみよ

硯

筆のもたうきもあとうとい状乃ぢよ入寅の月

紙

多乃ふふ大書こたうひきわをつうひわねと料紙ふうう

ち懸

庶乃皮いゆけよあ侍もやとう状又猫人のもあそわひる

箱

花とつけく牡丹と侍うるとこそけもあうるとこのかんう

帚

蓬とゝくれゐる酒とゝ
酒
住吉のうきゐもわとれたりのうゝ寝さめよひのまれね
餅
うゝもちの大仏餅の中五とさとれた米乃豆の薩摩うり
饅頭
わまかゝてわられぬ手ゐそ武者ゐ所橋のいゝねたくのまんちう
茶
ゐるゝ行ゝ所竹のあをからとれのもゆきわるゝのはとふえの音
天八

紙師の屏風といふるとゝ天八の竹の西とゝ行ぐ今れとも俗
琴
きゝ分ゐゐ琴乃調子い春ゐくゝ伯牙うゝくゝとも琴
鞠
蓮かゝゐと鞠乃ふゝるに吹笛風とうゝみのゝ次ゝ西ゐ
太刀
ねくとてもゝぐ月乃ゝやとゝ月ゝゐゝ伊の月ゐゝ大分れきゝつさ
鉄炮
氣乃菜ゐひゝあゝる鉄炮ゐ的ゐゝまねわるゝゝゝむ
職人

猫振舞をわるがるといくてまるがれたるきにおのれとそ
おもそうよ新とはたらふて家作る大工といそ鍋よいとのみ
あつ〳〵の粉とをとりとこたはよさすがうてひいとまやけうり
穂和所のまぐ屋とも尽よ人心とをてらそんゆきまろれ
一まいと方粉よりあたく屋こそ金とかれこうらやりそれ
世乃ときとんふあそうの極よ方の所世とさへこりあやや
棚ちとをれる弟屋乃職ちよそ天しなととなまれれ
ひ〳〵鍋とねけていはけるよ
かちも鍋とねけて見世のひ〳〵ひくとうらをを
人乃魯とそ〳〵なり

せうくのつこふとかく〳〵ひさうせ〳〵魯乃乃てねい大をまる
おく〳〵きはよそ人の機極のあり今わの
そ〳〵すみ人乃きげんとうるとうるいそ鉢所のたうえの
おさのひのえか〳〵むとふとあきよ
所とあるとむとあるとあるを書をあるりら髪れゆひあるつけ
碁うり人えんをれあるそひよざれと〳〵ろとあて
ちつ〳〵らんとえのあとけ碁を勝負おくわをとするとあ
の国ちらにれのけあるかみいのをみわへねる素鮒
人あとあるとあ人へとあて

なるるみとりとそこのひてくれかとしむるとものあ
ぬよそう
かくるのあれる海をみて
津ちひくあまさる屋ひのうら波風をそくる鬼か
ちくうの色となりぬ丸をわりくくるとりくく
でんがくのみそおにつくくちくうのうくとわりうろ色をそ
伊勢宗の庵をいむといふあるるのたわそる
社外をいせの宿をちるくくるむちくといむくらうら
ふるとは乃ちくくて気りちとうひくるよ
お気ちらのたりきもちねふ家ちかつるくしふるちら
なるくいさくのあまよつきてみのる海をちんるる

敷くのあみたのうもやとおけのゆひぶんとわきうんかう
そうむとうんく
女房乃ちらけてまく色をうみかうくの後のとさ
ちくみのるこをうときて
ちみたくむひのひうきかきれふよかるる武せ布
ふむうくう茶うるとうて
ゆきもせくたつ色茶の大海湾とえくくねれるるよこて
茶ひて酒うの海をけるる
たくれ宇治茶の色もきるよりあるる宿にいそとたん
海地の花石をつたふそて

あうてんと爲てんまをえてもつねの若かわや堺の
鯛
鯛小塩もつくとみく
樣鯛もつくふもかく自分とゆるたのもうさあんの料理し
奥屋くとみく
芋の屋乃ゆ元塩魚やよう爲て行のとうもさしやうり
とうしんのうへとひやりて
とうりゆうの業能いたるなもんもらふれく後身ゆるえ
いろう共とたにとこをれうり
きるとたうりゆうくとうりがんどん書ゆうれくるれとゆる
ゆとうとゆれ事といゆ流乃あふれあふく流る世事

業事きうてうふんをうにうのうて
病ともゆとうねゆの義醫者と人の命ゆ事ゆ
たうのすうとみく
なむゆのゆとうへのとうり時病ともうんきうてゆけまえ
子乃むゆまてくうとせんうり腸乃たうりゆれ
見たてうとせ乃ゆひさんとうとひ自ゆゆ行のまゆうゆ
やいとうとゆうて
藻ふうねゆ腹の事まゆうとゆうとうてゆうゆ灸いううみ
腸というむんう小腹く灸すうとゆうく
ゆうねゆ病ゆ此ゆ称いうむゆ廉子まううに灸とうゆう

世をのがれて極楽をもとむるとはいふ
なのうさにわがせかるるとまよひけり爾乃風のたちに

老人を

世をかなしみ時をけぶる人いたづらに老ぬれば
年もれぬるものをつまでむとこの世のうきをかなしみ

年もたるーをといひて笑きる人を

乃をとりつまでく
笑きてをこびんのうきゝ人の世をよそのうろ
老ぬる人のうらやましくのみのうらみ
老ぬるをとりあはせよりうらゝ老をわ春の山かう

比丘尼を

年をうきひくふえ髪をそりおとしてをんみをまん

順礼を

くるしけれどうきをなれやかるるれ極ひゆうん

猟

けものの弱ぬのをとうこかくるをまとるうのとこそよ

山家

山居せん真ちかくふかくまんがう治をも人のたつひらかと
ゆきもて山家のあるくあづらの心の楽をなに邪人
人の殺をとりしてゆうのうさを

なうなき世のわすれをとなりそなきさうあく人も善根[illegible]
[illegible]乳乃幕とゆるふもとをかしこ
わすれ野とも蓮のうなき世はてたれもあきあはよ庶よ
楠の木はなかふかとふ人の墓にはて
ゆとなりとの石とありこなりあり
寺の庭よりあく幸於濃なりそよ
家をみそれといふの清かれや数のそとはよりなは
宇治みすこわるる僧のもく文つるに人よかりて
唐ぬわくせをうぬ山よ長濃の家とやるとくきあん法師
たうとなきはるよあひく

述懐

海づらへ七宝の膝とやへよ海褄のひだのむかしの世や
泡ふふわはあるとのこのとをりとわい世いなり世

懐旧

業とのあい移まね花のそのひとりまて思ふ春を

無常

世中とかりへいきそう法の八万業色りのとれこうまを
やまのれとるとらひかれやらとを仏ら月ひとつ世よはなく
亭をとらく法みを西人い仏そよの世をかりれ高日

紙

中殿の前にとりわけ紙にてくゝりたるひまもなきを
殿の宮ゝ森の鳥の羽いろまてあるを井のうら
ゆるゝこゝいさゝ山や紙ゝ殿ゝ殿ゝ殿ゝ客人の
世ゝとゝ色ゝく新ゝたゝむ所やゝ浦ゝ殿ゝ白髪の神
人の世乃かゝきゝとゝみゝく紙乃滝の塩屋の神や道祖とゝ
あつまきゝ所廣乃神のゝるめんかゝきゝわけねゝゝ
ちゝゝゆゝ社ゝゝ乃ゝゝゆゝゝゝの紙ゝゝ殿ゝ神ゝゝゝ
ゝ藝の乃どゝ乃かゝきゝゝゝゝゝ殿ゝ湯ゝゝゝゝ神のゝ
ゝ

釈教

ゝゝゝゝ釈迦乃ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ
ゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝゝ

吾吟我集巻第十一

廻文哥

春

分の為にきくいかなるとかの為ちるとい歌よするのを
とゝ知ゆ今朝聖ゝ為の紫よりも色遊ぶさくらはけいきゆう

夏

四ゝ人奇て色とやみのけそんを被やゝうそ四ゝうへうる

秋

秋ゝきの乃紫ふ為第ふ乃為の闇ゝ色ゝ為ゝ遊ぶ菊さく

月のときくとゝ[illegible]の[illegible]

恋

つまをまつまひかそ出て[illegible]

恋乃たゝひとりたゝ門のもとくゝ[illegible]

面影と年月事と[illegible]

雜

[illegible]

濃川と[illegible]

四又百乃[illegible]

[illegible]

せんそのゝ夢ひさせゝ[illegible]

さとをもひ[illegible]

ひせうせるゝ夢ひかん[illegible]

述懷

[illegible]

[illegible]

[illegible]

かう[illegible]代い[illegible]民の弁たり[illegible]そのみさみさの記

[illegible]

於洛陽日除寺町

前川桂[illegible]耐梓板

[illegible]文庫